

からまい

Vol.21



INDEX

- 2 ----- スズキ株式会社 代表取締役社長 鈴木 俊宏 ごあいさつ
- 3 - 5 ----- 「新たな100年に向かって」スズキの2030年に向けての取り組み(その1)
- 6 - 7 ----- 〈TOPICS〉 昨年開催された「軽トラ市 in ジャパンモビリティショー 2023」や、スズキの最近のトピックスを紹介します
- 8 - 9 ----- 業務紹介「電動小型モビリティの開発に携わる若手技術者たち」
- 10-11 ----- 技術レポート「自動運転車の自己位置推定機能の開発」

スズキ財団ニュース

- 12-13 ----- 廣瀬 敏也 先生 インタビュー「交通事故の死者数ゼロを目指して」
- 14-15 ----- 研究室訪問 「山田 博俊 長崎大学 大学院工学研究科 化学・物質工学コース 准教授 博士(工学)」
- 16 ----- 研究室便り 「多田 昌平 北海道大学 化学システム工学研究室 助教 博士(工学)」
- 17 ----- 研究留学生者インタビュー 「インド工科大学 デリー校 Mr. Sarranya Banerjee (サランヤ パネルジェ氏)」
- 18 ----- 海外研修報告 「International Conference on Magnetic Fluid 2023 (ICMF2023)」に参加して
本澤 政明 静岡大学 工学部 機械工学科 准教授 博士(工学)
- 19 ----- [事業報告] 科学技術研究助成の1980年度から2022年度までの43年間の実績



<https://www.s-yaramaika.jp/>



スズキ株式会社 代表取締役社長

すずき としひろ
鈴木 俊宏 ごあいさつ

公益財団法人スズキ財団 理事長

約70年続いてきた東京モーターショーが2023年からジャパンモビリティショーにリニューアルしました。目標を大幅に上回る111万2000人が来場し、11月5日に閉幕しました。自動車の枠を超えて他産業やスタートアップなど新しい仲間も加わり、475社が出展・参加しました。スズキの出展テーマは『世界中に、ワクワクの、アンサーを。』とし、これまでの事業の枠にとらわれず、空飛ぶクルマや電動パーソナルモビリティなど、お客様にとって価値ある新たなモビリティをご提案させていただきました。

自動車業界は、100年に一度といわれる大変革期に突入しています。カーボンニュートラルと新興国の成長貢献を両立させながらも、多様化していく需要にチームスズキで応えていく必要があります。このような混沌期だからこそ、創業の原点「お客様の立場になって」を礎に、「小・少・軽・短・美」を徹底したものづくりを、「現場・現物・現実」に基づいた判断のもと、「中小企業型経営」によるスピード感を持って事業展開を行っていく必要があると考えます。既存の技術力に胡坐をかくのではなく、固定概念を払拭し、新しいものにどんどんチャレンジしていきます。

最後となりましたが、スズキはこれからもお客様の立場になって価値ある製品を提供し、ファンを増やしていく活動を進めてまいります。そのために、スズキ財団を通じて、大学・高等専門学校・研究機関の技術研究活動と高度な技術者の育成をサポートしていきますので、今後も私どもスズキ株式会社、並びにスズキ財団へのご指導、ご鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

新たな100年に向かって

スズキの2030年に向けての取り組み(その1)

環境にやさしく、お客様の生活を豊かにする商品と技術

スズキは、お客様に価値ある商品やサービスを提供していくために、様々な技術開発に取り組んでいます。今回は、昨年10～11月に開催された「JAPAN MOBILITY SHOW 2023」のスズキブースで展示した、地球環境にやさしく、お客様の生活をより豊かにする、楽しくワクワクするような商品と技術をご紹介します。

テーマは、「世界中に、ワクワクの、アンサーを。」

「JAPAN MOBILITY SHOW 2023」は、前回の東京モーターショー2019から名称と内容を変更して開催されました。スズキの出展テーマは、「世界中に、ワクワクの、アンサーを。」とし、「将来のカーボンニュートラルにむけたスズキの多様な取り組みを、スズキらしいモビリティやサービスでお客様にお届けする」というメッセージとともに、楽しさ、ワクワクを体感できるブース展示、演出としました。



スズキの展示ブース(左)とブース内でのショーイベント(右)

環境にやさしく、お客様の生活を豊かにする商品と技術への取り組み

地球規模の気候変動への対策が求められる中、スズキはカーボンニュートラル実現に向けた電動化や水素の利用など多岐にわたる技術の開発に取り組んでいます。また、快適性の向上や先進安全技術などの開発に取り組むとともに、これまでになかった新しいモビリティなど、お客様の生活をより豊かにする価値ある商品や技術をご提案しました。



お客様に価値ある商品やサービスをご提供するため、スズキのさまざまな取り組みを紹介する鈴木社長



上記QRコード[®]は鈴木社長によるプレスブリーフィングの配信動画

※本記事(3～5ページ)に掲載した車両および技術展示は、すべて参考出品車または参考技術展示です。
※QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です。本動画は予告なく変更または削除されることがあります。

カーボンニュートラル実現に向けた技術開発

グローバルでのカーボンニュートラル実現のためには、各地域の交通インフラやエネルギー事情など、お客様が暮らす地域に適した取り組みが重要です。そのためにスズキは、電動化技術の開発に取り組むとともに、マルチパスウェイでの取り組みとして、内燃機関などの既存技術を活用したCO₂削減や、水素を利用した技術の研究・実証にも取り組みます。

(1) 電動化技術 ～お客様のニーズや利用スタイルに対応した技術開発～

スズキがご提案する
電動化技術や商品の展示

- ① スズキのSUVにふさわしい本格的な走行性能を実現するEVモデル「eVX」
- ② 毎日の生活に寄り添う楽しく実用的な軽ワゴンEV「eWX」
- ③ パナソニック サイクルテック株式会社製の電動ユニットを使用した近距離モビリティ「e-choinori(イーチョイノリ)」
- ④ パナソニック サイクルテック株式会社と共同開発した折り畳み電動モペッド「e-PO(イーポ)」
- ⑤ 運びやすさやメンテナンスの容易さなど、より気軽に環境にやさしく使える電動船外機「Small e-outboard concept」



(2) 既存技術を活用したCO₂削減

カーボンニュートラル実現のためには、電動化技術の開発が重要になりますが、その普及拡大までに取り組むべき環境対応も数多くあり、将来を見据えた技術の研究開発も重要です。

そのためにスズキは、既存技術を活用したCO₂削減に取り組んでいます。インドで牛糞を利用したCBG(圧縮バイオメタンガス)実証事業の検討や、水素燃料を使ったエンジンの研究開発などマルチパスウェイでの取り組みを行っています。

また、燃費性能を向上した高効率エンジンなどCO₂削減に向けたさまざまな技術開発に取り組んでいます。

- ① インド市場向けの「ワゴンR CBG車」
インドで牛糞を利用したCBG実証事業を検討
- ② 水素エンジンバグマン(試験車両)
市販モデル「バグマン 400 ABS」に70MPaの水素タンクと水素エンジンを搭載した試験車両のカットモデル
- ③ 「スイフト コンセプト」に搭載した高効率エンジン



※本記事(3～5ページ)に掲載した車両および技術展示は、すべて参考出品車または参考技術展示です。

移動する楽しさや快適性、安全安心につながる技術への取り組み

お客様が日々の生活で、より楽しく快適に、安全安心に商品をお使いいただくために、さまざまな工夫や新しい技術の開発に取り組んでいます。

(1) 快適な移動に役立つアイデア

「スペースシア コンセプト」・「スペースシア カスタムコンセプト」のリヤシートの座面前方に装備したマルチユースフラップは、長時間の移動の疲れを軽減し、後席に座るお客様にも快適な室内空間をご提供します。



「スペースシア コンセプト」の外観(左)とリヤシートのマルチユースフラップ(右)

(2) 安心につながる先進安全技術

「スイフト コンセプト」は、ドライバーの運転状態を監視する機能など、数多くの先進安全技術を搭載しました。

また、「スズキセニアカー」には車両前方の障害物を検知する超音波センサーを装着するなど、安全安心に、気軽に移動できる価値をご提供します。



「スイフト コンセプト」

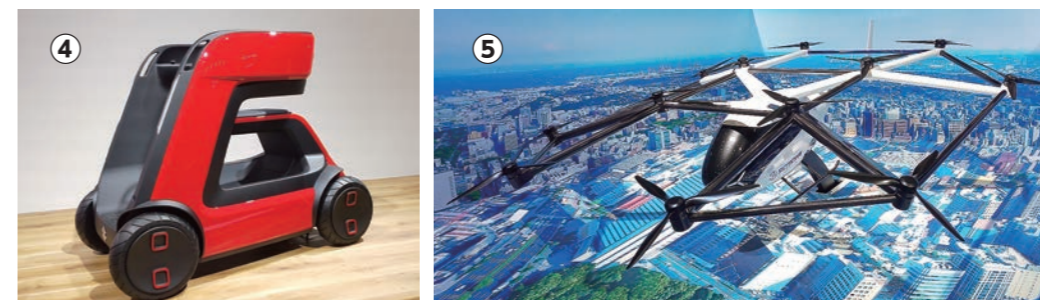
「スズキセニアカー」

モビリティの新しいカタチ、新しい楽しさやワクワクを

扱いやすいコンパクトなサイズと電動化技術で、より多くのお客様が気軽に楽しく移動できる、環境にもやさしいモビリティや、新しい交通手段として大空を移動するモビリティなど、さまざまな楽しさやワクワクをご提案しました。

電動小型モビリティ

- ① 平地は車輪でスムーズに、段差は4つの脚でシームレスに移動できる「MOQBA(モクバ)」
- ② パーソナルユースとして毎日の生活、通勤通学をもっと楽しくする「SUZU-RIDE」
- ③ マルチユースとして大きな荷台を備え、遊びや仕事をもっと楽しくする「SUZU-CARGO」
- ④ 「G」をモチーフにしたデザインの、気軽に楽しく安心な移動体験をご提供する「SUZUKI GO!」



- ⑤ 株式会社SkyDriveとの協業でスズキグループの工場を活用して、製造開始を目指す「空飛ぶクルマ」
・ブース内では1/5サイズのスケールモデルを展示。

まとめ

JAPAN MOBILITY SHOW 2023では、スズキは総合モビリティ企業として、地球環境にやさしく、お客様の生活をより豊かにする、さまざまなモビリティ商品と将来を見据えた技術をご提案しました。私たちはこれからも、スズキ

の商品をお使いいただいているお客様や、スズキにご関心を寄せていただいているお客様・社会に対して、カーボンニュートラル実現に貢献する、もっと楽しくワクワクするような価値ある商品と技術の開発に取り組んでいます。

昨年開催された「軽トラ市 in ジャパンモビリティショー 2023」や、スズキの最近のトピックスを紹介します。

「軽トラ市 in ジャパンモビリティショー 2023」が、モビリティショーにあわせて開催

「JAPAN MOBILITY SHOW 2023」開催期間中の昨年11月3日に、「軽トラ市 in ジャパンモビリティショー 2023」が開催されました。全国各地から集まった軽トラックの荷台にはその地域の特産物が並び、多くのお客様が足をとめてお買い物を楽しんでいました。



上記QRコード[®]は日本自動車工業会の軽トラ市紹介HP



たくさんの人を集め、笑顔にして、地域の活性化に貢献する「軽トラ市」を応援

軽トラ市開催に先立ち、ジャパンモビリティショーのスズキ展示ブースにおいて、軽トラ市のプレスブリーフィングが行われました。そのなかで、日本自動車工業会 軽自動車委員会の委員長を務める鈴木社長は、「軽トラ市は人と人の距離が近く、人のつながりや温もりがあります。軽トラ市を通じて、日本が元気になってほしい。そのために私たち日本自動車工業会は、これからも軽トラ市を応援していきます。」と述べました。

左：軽トラ市の魅力を紹介する軽自動車委員会 委員長の鈴木社長



軽トラ市で、出展者の方やお客様に話しかける鈴木社長



お店の方とお客様の距離の近さも、軽トラ市の魅力のひとつ

鈴木社長はつづけて、「2005年に岩手県栗石で始まった軽トラ市は、現在では全国100カ所以上の地域で開催されています。この軽トラ市のように、人を集め、笑顔や元気を与えること、地域の活性化に貢献することが、軽自動車メーカーの使命であると考えています。そのために私たちは、軽トラ市団体や出店者のみなさまのご意見を伺いながら、出店や告知活動などのお手伝いをしてきました。これからも日本自動車工業会をあげて、軽トラ市をもっと盛り上げていきたいと考えています。」と述べました。

* QRコードは株式会社デンソーウェブの登録商標です。本URLは予告なく変更または削除されることがあります。



モビリティショー会場のスズキ展示ブースで、軽トラ市を紹介するパネル展示や軽トラック「スーパーキャリイ」を使ってスズキのグッズを販売

スズキ、インドでのバイオガス実証事業について3者で合意

— 2025年以降4つのバイオガス生産プラントを設置 —



スズキ株式会社（以下、スズキ）は、インドのカーボンニュートラルの実現に貢献するバイオガス生産プラントの設置について、スズキ100%出資のSuzuki R&D Center India Private Limitedを通じて、National Dairy Development Board（全国酪農開発機構、以下NDDB）およびアジア最大規模の乳業メーカーであるBanas Dairy社（本社：グジャラート州、以下Banas Dairy）の3者間で合意しました。

昨年9月にインド大使館において、Banas Dairyのチョードリー会長、NDDBのシャア会長兼社長、スズキの鈴木社長により契約締結式が行われました。式典には、日本国駐劄インド共和国大使シビ・ジョージ閣下にご臨席賜り、歓迎と成功祈願のお言葉を頂戴しました。

スズキは2022年12月にNDDBとBanas Dairyの3者で、牛糞が発酵することで発生するバイオガスから自動車用燃料となるメタンを精製する実証事業開始に向けた覚書を締結し、検討を進めてきましたが、今後、グジャラート州バナスカンタ地域において、2025年より順次4つのバイオガス生産プラントを設置していきます。4プラント合計の投資額は23億ルピー（日本円で約40億円）を予定しています。また、各プラントにはバイオガス充填スタンドを併設し、インドでマルチ・スズキが7割以上のシェアを有するCNG仕様車の燃料として販売します。

スズキとパナソニック サイクルテックが電動アシスト自転車の駆動ユニットを活用した新しいモビリティの共同開発に合意



左：パナソニック サイクルテック製 電動アシスト自転車用駆動ユニット
右：パナソニック サイクルテック製 リチウムイオンバッテリー

スズキ株式会社（以下スズキ）と、パナソニック サイクルテック株式会社（以下パナソニック サイクルテック）は、電動アシスト自転車の駆動ユニットを活用した新しいモビリティの開発に合意しました。

今回合意した共同開発は、パナソニック サイクルテックが開発、製造、販売を行っている電動アシスト自転車の小型・軽量な駆動ユニットとリチウムイオンバッテリーを活かし、スズキの二輪車開発技術と組み合わせることで、新しいモビリティについて商品化の可能性を検討するものです。

スズキは、新しいモビリティの企画、実験を担当し、パナソニック サイクルテックは試作車の製作、駆動ユニットの供給などを行います。

スズキは、1999年にパナソニック サイクルテックとOEM供給契約を締結^{*}、現在は電動アシスト自転車「ラブSNA24/26」のOEM供給車を販売しています。

スズキとパナソニック サイクルテックは、二輪車と電動アシスト自転車のノウハウを持ち寄り、協力することで、将来のカーボンニュートラルに向けた新しいモビリティの提案へつなげたいと考えています。

* 1999年当時はナショナル自転車工業株式会社との契約によるOEM供給。
* 記載されている商品名、会社名等は各社の商標または登録商標です。

電動小型モビリティの開発 に携わる若手技術者たち

スズキは、お客様が気軽に楽しく、安全安心に移動することができる、さまざまなモビリティをご提供しています。今回は、電動小型モビリティによる新しい価値の提案にチャレンジする若手技術者を紹介します。



JAPAN MOBILITY SHOW 2023に参考出品した「SUZU-RIDE」(左)と「SUZU-CARGO」(右)



農業支援用に性能検証中の電動小型モビリティ



電動小型モビリティの開発・検証
岡本 祐輔

農作業支援用の電動小型モビリティに自動走行や遠隔操縦システムを組み込んで、実際の作業現場で性能を検証しています。新しい技術を農作業に役立てるために、農園に足を運んで自分の目で確認しながら開発できることにやりがいを感じます。



電動小型モビリティの企画
西浦 充紘

高齢の方にとって日常の足となるシニアカーだけでなく、さまざまなモビリティ商品を企画しています。新しい電動モビリティの企画を通じて、お客様に豊かな生活を提供できることに面白みを感じます。

電動小型モビリティの技術を活用した小型ロボットの企画・開発を行っています。異業種の方との開発のなかで、考え方や発想の違いに触れて刺激を受けることが多く、日々成長を実感できます。



電動小型ロボットの開発・企画
村田 智晴



電動小型モビリティの企画
齋藤 喜史

電動歩行器と電動車いすの機能を兼ね備えた電動モビリティ「KUPO」の企画・開発を行っています。企画担当者として、お客様の声を聴き、設計者と協力してモノづくりをするところに面白さを感じます。



設計支援 (CAD)
伊藤 千尋

CADを使って電動小型モビリティに使われる部品の3Dモデルや図面を作成しています。部品の試作段階から1台の車両として実際の形になるまで、車両の開発全般に携われることが魅力です。

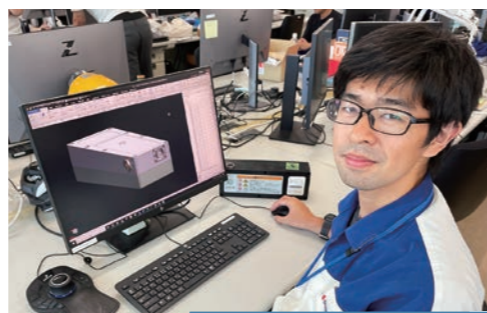


コントローラ部品設計
山崎 慎平

シニアカーのコントローラを設計しています。電子基板や実装される電子素子などのハードウェアとマイコンに書き込むソフトウェアの両方の仕事に携わることができるところが面白いです。



JAPAN MOBILITY SHOW 2023に参考出品した「SUZUKI GO」



リチウムイオン電池の部品設計
青沼 成哉

電動車両のリチウムイオン電池の開発・設計をしています。小さいサイズの車両にいくかに多くの電池を搭載できるか、自分自身で工夫を凝らすところに挑戦のしがいがあります。



設計支援 (CAD)
加藤 優奈

CADによる部品の3Dモデルと図面を作成しています。設計者の意向を確認しながらのモデルづくりには根気が必要で、意向にかなったデータを作成できたときは達成感と喜びを得られます。



シニアカーの車両CADデータ

外観の樹脂カバーやランプ部品を設計しています。魅力的で安全な車両を目指して細部まで作りこんでいます。若手にも設計が任されているため、自分の設計が商品性に直結していることに充実感があります。



外装部品設計
榑林 碩人



ハーネス部品設計
森 優也

電動小型モビリティが設計通りに動くように、各部品を電氣的に接続するワイヤハーネス部品を設計しています。部品の性質上、多くの設計者と調整しながら、力を合わせてモノづくりを達成する魅力があります。



ステアリング部品設計
石井 遼平

電動小型モビリティのステアリング(ハンドル)を設計しています。お客様が安全安心に乗れる車両を目指して、自ら提案をしながら設計できることにやりがいを感じています。



シート部品設計
林 空良

高齢の方が毎日遠出したくなるような、座り心地の良いシートを設計しています。良いシートを形にすることは大変ですが、街中で高齢の方がシニアカーに笑顔で乗っている姿を見かけたときは感慨深いものがあります。

自動運転車の自己位置推定機能の開発

(技術トピックス1) スズキの自動運転車開発の取り組み

(技術トピックス2) 自動運転車に必要な機能

(技術トピックス3) LiDARによる自己位置推定手法

背景・狙い

スズキは、限定地域の特定条件下で、すべての運転操作をシステムが行う自動運転レベル4の車両開発に取り組んでいます。自動運転車を精度良く走行させるための重要な機能の一つに自己位置推定機能があります。この機能は、車両が地図上のどこの位置にどのような姿勢でいるかを正確に推定する機能です。ここでは、現在開発している自動運転車に搭載しているLiDAR(Light Detection And Ranging)による自己位置推定手法について紹介します。

スズキの自動運転車開発の取り組み

スズキは小型四輪車のソリオをベース車両としてレベル4を目指した自動運転車の開発に取り組んでいます。また、2016(平成28)年より浜松市、遠州鉄道、BOLDLY、スズキの4者が連携した浜松自動運転やらまいかプロジェクトに参加して、交通サービスのニーズに合った車両開発を進めています(図1)。

2022年5月に第3回目の実証実験を浜松市西区の庄内地区で実施しました。乗車予約・自動ドア開閉などのサービス機能を実装した車両と、あらかじめ規定されたルートを自動で走行する車両の2台を用意し、地域住民の方に試乗していただき、乗り心地やサービスの受容性について検証しました。

自動運転車に必要な機能

自動運転車が一般の道路を走行するためには、認識・判断・操作の3つの機能が正確に動作することが必要です(図2)。

認識機能は、自動運転車の位置と姿勢に加えて、周囲の車両や歩行者を認識します。判断機能は、認知した情報や交通ルールから走行するルートを探索して、目標とする車速や進行方向を決定します。操作機能は、車速や進行方向が目標値どおりになるよう自動運転車の加減速やステアリング操作を自動で制御します。

これらの機能のうち、自動運転車の位置と姿勢を正確に認識する自己位置推定機能が、他の機能の精度を維持するために重要になります。



図1 浜松自動運転やらまいか*プロジェクト
*「やらまいか」とは静岡西部地域の方言で、「とにかくやってみよう」という新しいことに挑む気概や精神を表す言葉。

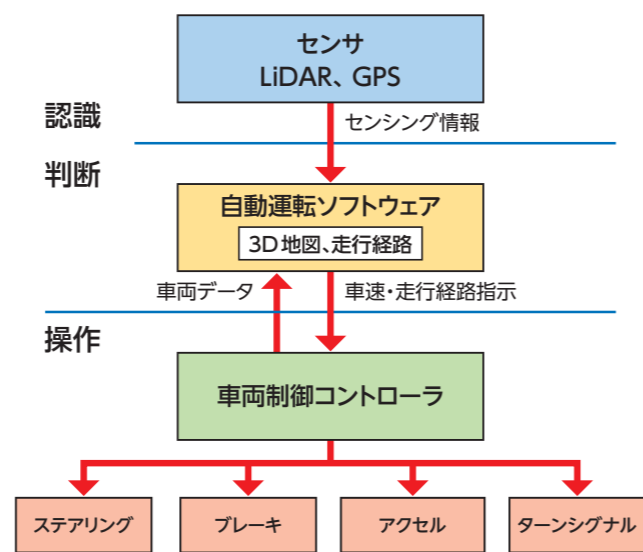


図2 自動運転車に必要な3つの機能

LiDARによる自己位置推定手法

開発中の自動運転車には自己位置を推定するために、LiDARと呼ばれるセンサを搭載しており、車体ルーフの中央上部の周囲360度を見渡せる高さに設置しています(図3)。

LiDARは照射したレーザー光が物体に反射して戻ってくるまでの時間を測ることで物体までの距離をミリ単位で計測することができます。搭載しているLiDARはセンサ部が一定周期で回転しており、360度の距離データを等間隔で出力しています。

自己位置推定はLiDARが出力した1周分の距離データと高精度3D地図を照合することで、車両が地図上のどこに位置してどのような姿勢でいるのかを推定します。高精度3D地図には、走行するルート上の路面標示や道路標識、周囲の家屋や樹木など実空間に存在する構造物の3次元情報がミリ単位で記録されています。

LiDARの計測データと地図データが最も一致する車両の位置と姿勢を最適化して探索することで自己位置を推定します(図4)。

周囲の物体認識やルート探索といった後段階の処理に対応するため、自己位置推定の高い精度が要求されます。



図3 自動運転車の外観

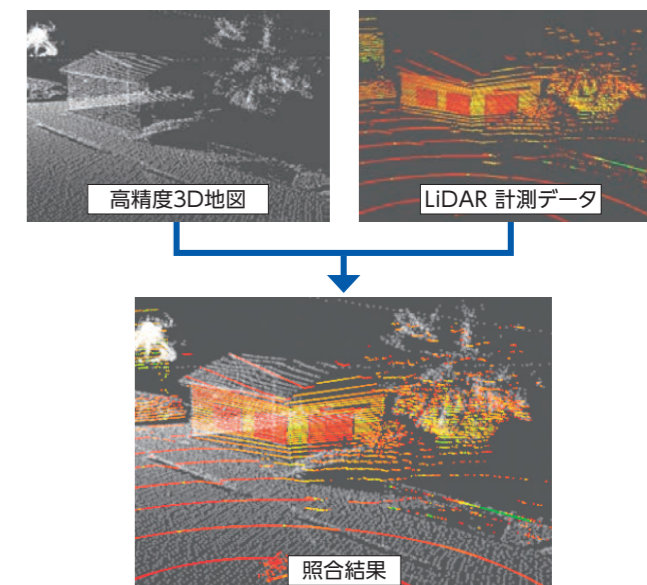


図4 自己位置推定結果(例)

技術課題

LiDARによる自己位置推定は周囲の構造物と計測データを照合しているため、周囲の構造物が少ない場所や、建物や樹木が地図と一致しない場所では精度が低下する可能性があります。

LiDARによる自己位置推定手法以外にも、衛星測位システムによる高精度測位、路面標示の色や輝度の情報を利用した位置推定、車速と角速度から現在位置を算出する推測航法といった様々な手法がありますが、それぞれに一長一短があります。今後はこれらの手法を組み合わせることで、高精度かつ安定した自己位置推定機能を開発していきます。

著者紹介



久保田 整 次世代先行技術開発部 専門職(係長) (1989年入社)
東條 芳明 次世代先行技術開発部 係長 (2013年入社)
富澤 友樹 次世代先行技術開発部 チームリーダー (2014年入社)
大谷 元気 次世代先行技術開発部 一般 (2020年入社)
小林 良夫 次世代先行技術開発部 一般 (2020年入社)



公益財団法人
スズキ財団

<https://www.suzukifound.jp/>



機械工業の発展を願って

スズキ財団は、日本の社会の発展に貢献してきた機械工業の飛躍のため、科学技術に関する研究に従事する全国の大学、大学院、高等専門学校及び、公的研究機関の研究者を支援しています。

設立 スズキ株式会社創立60周年を記念して、1980年3月に設立されました。

活動実績 これまでの43年間で、全国の研究者の皆様や海外からの研究留学生に累計2,037件、総額25億7,748万円の研究助成を実施しました。
また、スズキ財団創立40周年を記念して創設した顕彰事業「やらまいか大賞」と「やらまいか特別賞」は、2023年2月に第3回授賞式を行いました。

総資産 111億1,193万円(2023年3月末)



公益財団法人
スズキ教育文化財団

<https://www.suzuki-ecfound.com>



青少年の健全育成を目指して

スズキ教育文化財団は、静岡県内の高校生や静岡県出身の大学生に対する返済不要の奨学金給付や特別支援学校で学ぶ子どもたちが使用する物品の寄贈、外国人学校で学ぶ児童・生徒への支援を行っています。

設立 スズキ株式会社創立80周年を記念して、2000年10月に設立されました。

活動実績 これまでの23年間で、577名に、総額4億4,182万円の奨学金を、特別支援学校に総額1億980万円の物品をお届けすることができました。

総資産 47億3,475万円(2023年3月末)



公益財団法人
鈴木道雄記念財団

<https://www.smmfound.suzuki>



社会福祉の向上・スポーツの普及振興に貢献します

鈴木道雄記念財団は、社会福祉法人への福祉車両等の寄贈、児童・青少年に対するスポーツの普及・振興事業への助成を行っています。

設立 スズキ株式会社の創業者鈴木道雄の遺徳を偲び、鈴木家が同社株式25万株を寄付して2018年1月に設立されました。なお、2023年7月には35万株の追加寄付があり、鈴木家の寄付株数は60万株となりました。

活動実績 これまで、静岡県内の社会福祉法人37団体に福祉車両を寄贈したほか、スポーツ指導者の育成や児童・青少年がスポーツにかかわる機会の創出を行う団体に2,257万円の助成を行いました。

総資産 36億6,563万円(2023年9月末)



静岡県西部にはこの地域の方言で、「とにかくやってみよう」「やろうじゃないか」という意味の「やらまいか」という言葉があります。

これは、遠州人の「あれこれ考え悩むより、まず行動しよう」という進取の精神を表すものと言われ、チャレンジ精神を大切にする風土を育んでいます。

これを合言葉に、自動車産業や楽器産業、オートバイ等々世界を代表する企業を輩出してきました。

やらまいか 2024 January Vol.21

発行日:2024年1月

<https://www.s-yaraimaika.jp/>

発行/スズキ株式会社
編集責任者/角野 卓

スズキ株式会社 本社:〒432-8611 静岡県浜松市中央区高塚町300 ホームページ:<https://www.suzuki.co.jp/>

公益財団法人スズキ財団:〒105-0021 東京都港区東新橋二丁目2番8号 ホームページ:<https://www.suzukifound.jp/>

表紙題字/平形 精一(静岡大学名誉教授)

